

詠歌大概安心相訣 上

詠歌大概



詠歌ハ謳吟也先ニ神の神歌

是一切言語のこゝろと云ふ

へし又素素車馬尊五句

三十一字ハ仰りあせるい。

音律をえとて詠歌の理

よくかたまり句ハ五句一切て

唱りよめりやも又ほゆ

柏子り三十一字ハ世とみ字

を表せり三十年を一世とす

三十一年とかりりや力世不

易の道理を合たり又一月

三十日とつ甲申と三十一日と

う甲申を一カ代毎に躬のこ

くもせ上の句ハ天下乃句ハ地

詠一知るふ人々也又五句ハ五

句ハ五句ハ五句ハ五句ハ五句

主とかり天地同々てやと吹出

る風の空に乃葦草分より

もよぬまじり也一則歌也

されとも人の言語一切の御音

みはなうよあふといふを風





みぢなうゝよあはすとよこし風  
大概とりあは大概の秘傳有  
歌道ハ言盡かりまのりま  
只大むね大くそるをある  
と定家ハの早下謙退を誦  
二字よこめつまつる二條家  
乃よりこが謙退を本とす  
を殊傷の女又ちへ一又和  
哥ハ其理をいはずをい  
よぢり余情有を本とす  
後鳥羽院在今の序六歌仙の  
中いつまうすくれとるると定家  
よゆ尋有る業本を最上と  
勅答りしゆり時りまハ公わ  
り申して詞とつととあまをい  
有るに其公あるり申して詞の  
うぬり則いづらり  
を以二條家よりこがを自得  
す

情以新為先

情乃字よ心意識を具して  
津のわて哥をよみ出す公と  
甘く女ハの序よやゆとこハ  
人の心をうねとこ  
本末本有不動の心主也みる  
そのきくそのよはきて云おせ  
よのこし心識也此情の



衣のきくそのよはきて云也  
かりといふ意識也。此情の  
字之心篇も青以字をかろ心  
情淨潔白此水乃よりくをれを  
青くみゆる也青きう至て深  
かれん玄くこゆる也仍玄水とを  
玄澗とをこふ也其こころ心の  
きけしこちて意ようらう柳  
のみとら花いられさ井とまら也  
うまらう識情ようはら時柳  
ハ婦女のみとりの髪とをん花  
も雲月ハ雪紅葉を錦とい  
ふことく深く情を入れてゆる  
時玄妙幽玄乃うらハ出米は  
あるへー新といふはうら  
二條家乃心ハことと花ハ春毎  
うれとをかく也香ハ艶なりハ  
未見す月ハいく秋うれと  
清明ハ未見すといふうの心也  
毎年乃ら中秋乃月を三五夜  
中新月色とみよわら新  
子夜をよるもんとて天よ  
もりける駒の角乃やうなる  
こととをちり勢ハ異風異祥  
よる也又物もれと一向曲  
り唯古人乃うれをひら  
るなり也此境大女也定家  
歌



歌り

と一乃曰よ二月三月ほとこなく  
けられてえちまぬ花の付

又道念法師ういよ

春ことに見る花あれといとけり

嘆く〜頭くる心地こころす

此うの心高流のりこけいよおま  
甲と〜

詞以舊可用

詞又於此道根本と守心地乃實

り甲且花をえて詞林り

同く時令感鬼神徳有也天

地鬼神の感動するを公けく

文義をかち甲うほい〜も歌

け〜とハ也何ほと公有とえ詞

と〜のりすもは〜らるる歌り

毛乃母の心をえたるをちみま

婦乃中をや〜る徳ありしや

此書的情詞を花實相對する

つた〜いせ〜つと此先達を公詞を

車乃兩輪身乃双翅之のこ〜

せよと〜分り安倍清け和歌

先祀花實り〜し花の中に

花を求玉乃中よ心をけりへ

といつ〜是奇特なる文物のり

畢竟少ふこととれやす〜  
甲と〜



畢竟少ふことこれやすし  
ことわらやけく新まじり  
はともすうよく分也

風粹可效堪能先達秀歌

風粹風諷也 文花也

賅ハ敗俸也 質也

風粹乃二字は花實うらま

は事え風粹さうらうたれし

公詞ハ自然ハ具するその也

風粹ハはらくあらま乃也二粹

ハ落るを邪道とす風粹あ

うれし其ハ害あらといふ

今文目前ハ有ま也風粹吟

声ハ世の法乱人の假真心を

あるま又揚事也古今集加如序

ハ其公ハえし代ハ撰集

又ハ如のこと風粹あは

をらみあすいんう古ま

堪能ハ主得れ是白里生

はまはるうらう人ハ我古

はの甲世ハま人ハまゆるれ

する上手をよけるへ先

達ハ於歌道師傳ハ傳を

残ハ所ハる傳へえて的相

美まらる人也

秀歌ハ詠吟ことハは

秀歌ハ詠吟ことハは



秀歌とい詠吟ことさへは  
業性すこわらば申ふもや  
とて心も巧い詠乃  
外りてあるや申ふもや  
多し詠吟てははもこも  
志うやすしうたう景氣  
うておまけしは  
いみてはるかを詠くは  
かぬうよて侍りしをわ  
らむしとすうたう我古  
へんて自然よらうも  
よて

不論古今遠近見宜歌可  
效其伴

此類秀歌大畧りある但當  
時乃新歌よを手存るは  
自然の有由も相あると  
あうへし是りて三義我  
別よ可受傳受

近代之人所詠出之心詞雖一  
謹而可除奇之

此所二條家よりかへは  
友也十一箇乃内也別よ可受傳  
受是也也也念あも諸道  
此心をもつては謹而の  
字は眼をばへし人のわ



字又眼をばへし人の物成  
とある金玉を種はらひる  
財宝を盗に取らるるも能  
怨をのみしるべしと也

七十年以来人所詠出之正詞  
効不可取用之

本歌取直又當流金業詞に  
ふていともやうに余議たり  
とててえりしかりしより

仰況上古の歌、淳朴抄れ  
取取乃らけいあ梨新古今時  
代との歌もこりやうしをす  
きほりしれ取取抄れ此趣を

無相傳乃人近代の歌を忍よ  
とらまかすく放埒の至り也

如北之時無取古歌之難領

本歌とらよぬ固條乃口訣  
傳わりてよををあかす

一本歌ニ舊カ上ニモ古キ歌ヲ專ニ

一取ヘシカ多クナトノヤスカウヌ詞を  
艶ニ取ナシタルカヨキ也

一古来人の取ツケテ度にお名歌  
各別ニカハラサレハメツラシカウス

一珠キ本歌ヲ取ルニ習ヒアリ人ノ  
聞シリタル歌未抽ワタリテ取  
ルニハアラテ取残シタルシトル珠ニ



一 珠キ奉歌シ求ルニ習ヒアリ人ノ  
聞シリタル歌未<sup>レ</sup>抽<sup>レ</sup>口タリテ取<sup>ル</sup>  
ルニハアリテ取<sup>ル</sup>残シタルシトルル珠ニ  
宜也

一 ~~万葉集~~ニモ奉歌ニナルハ四百余  
首ハカリトイヘリ定家<sup>ノ</sup>説也

一 奉歌ニ一節アル詞シトルカヨキ也  
每文ノ詞ヲ取<sup>ル</sup>ハ詮ト也

一 二句ノ上三四字トイヘトモ随分一<sup>句</sup>ニ  
テセ<sup>ル</sup>至ニ三字ニテモ奉歌ノソレ  
ト恒ニキユルヤウニ取<sup>ル</sup>ヘシモ上手  
ノワサ也

一 三句ニワタリ又句ノ置取モカハラ  
ヌシ嫌<sup>フ</sup>トイヘトモ心各別ナレハ  
サルナリソレノ歌ノ上ニテ見エ  
ヌ也但三句トリ又三句ニワタル  
事ナヘテハキラフ也

一 同シ物ニ同シモノシヨム也又キ  
ラフトイヘトモ是モ心クニカハリヌハ  
ズルサル也シカモ上手ノ取<sup>ル</sup>作也初<sup>心</sup>  
未<sup>レ</sup>練ノ人サヤウニヨメ<sup>ル</sup>同シ心ニハナ  
ル也故ニ誠タリ

一 奉歌シトルハ逸物ノ猶ノ留<sup>ル</sup>シト  
ルヤウニ取<sup>ル</sup>ヘシ先奉歌ノ詞ノカシラニ  
一取<sup>ル</sup>ツクヘキ也又奉歌ノ旨トスル心シ  
トルヘシ詮ナキ所シトリタルハ尤<sup>モ</sup>  
下ノ也也

常観念古歌之景氣可染心  
此<sup>レ</sup>恒ハ更<sup>ニ</sup>昔奉歌ノ界<sup>ノ</sup>也



常觀念古歌之景氣可染心

此修八重人音未歌本界也との四

わうたをい入る歌乃心詞風伴又

ハ景氣乃うかいはる取をうらむ

思惟して心肝より流る也。

常の字眼字也立起外心よか

らと也此古歌乃景氣を觀念し

修りの功をばるる自業自得

時節有へし又歌ハ景氣を全

とするかたひ有景氣のよる調

むるる哥ハ必感氣有る乃也

感又歌乃至極也感せしれ鬼

神を感せし人偉をやつら徳

いそる有へん又仏神の細受ま

有へさやうたし但感をはるい

わろし自然とるのうまうを

ハ用しる感也可付眼

殊可見習者末 伴銀物語

後撰拾遺

歌道ハうかひと歌字と別也

別よあつた又才有人え歌乃

不堪たのあり文盲なる人トモ

うかひよえらるあり古今よわ

うりて此は道と才覺たつてハ

歌境ハ入りしきこのたれハ境

歌字乃上をあり寸殊ト云字の

心ハ字する書乃中よてえ殊也

乞大概の心也



乞大概の心也

平六人集之四殊上手之歌可  
懸心人磨貫之忠孝作解  
小町等之類也

此五人をおきて類とかける女は  
又大概也五人り准する歌人先  
人磨といへる赤人といふ有り  
貫之といへる赤恒あり忠孝  
友則ハもくはる其外古今  
の序よかふる六歌仙も経信  
俊頼俊成伊勢小町よ此す為  
の赤深赤の和泉式部式子の親王  
俊成卿女等也三光院殿も  
定家つゝえ此のへ入るより  
中ついで和歌血脉相傳の  
上よてなつといふ女と

雖非和歌先達時節之景氣  
世間之盛衰

時節之景氣歌乃町要也

先之春の朝より年中此節  
雪月花ハあま及て身乃  
一声がけ風れうと吹うも  
雨のうらさくもよま心をば  
感氣をうらすとよ女あふ  
相道を枕古せむ筆元相



相汝道を秘古せむ華元洞  
除ね小至るるて一度更か多節  
の歌をよむむよは歌境よ入とよ  
支傳へ有是時節の景氣を  
心ようは徳を和歌三神應護志  
よつる友たりへ師白今眼前  
庭の本草を歌をよむ先とよね  
えかりたりをむらくせむはに  
おもき支よりあらずや

又曰哥乃心なり此その四時の  
ら甲乙の景氣草木禽獸  
をばはるまのりまよら  
かちてあはぬそのよえむを  
かちて感を發す是歌人の徳也

又曰四季の風景はいふ及もす  
あやしむ志け山賊の志わす其  
こととちまの上よえ心をと先て見  
をくへは凶先達とたりてあはる  
て趣向そうかい出まらるるもの也

又時節の景氣を時宜乃亦  
とら也是又二條家讀かこり  
才一の支とする也時宜よるむ  
ねとて秀逸名歌とて之曾以  
詮たるへそむをそ知音り

たりける人の許をとりてし  
よるむよらる此由緒かをそ  
聞とけけけあいらたりや



聞とけけしあおい乃ちりさやの  
心津ひひしてよむへいさまとう  
世間之盛衰と云を又殊勝の  
支也。歌人平生可思所感  
者必衰の理也。古今序は春  
物花乃ちるを見。秋乃夕木  
の葉は落るを聞あついとこよ  
鏡のかきみゆり雪と浪とを流  
草乃露水の流をこてわらむを  
おとらさ。あふはきののい栄へ  
をこつて。時をこりさひ世はわ  
ひちつしかりしをうとくあり。  
と書りこを以可觀此序を  
川用ふ支ちひい也。和歌は此  
固乃大道はれん有為無常  
を知り世間の上を助辨して  
教識とちりす也。此理を眞實  
思ひ志して。且心中よりこきい。  
討外りあつれて。自然と  
理は徹しける。歌はま  
去れる世間之感衰則先達  
とちり事必定也。

為知物由

由はま集詩集の中をいやは  
たつたのよそよそ和歌よかやせ  
とりわたり。此才一才一快は時即之  
景氣世間之感盛衰をあかひる



景氣世間之感興表をわがしる  
詩文多クもて常まとうて  
あうわよことの由を志うて詠  
お寸歌の喜味あうかかへ  
物して歌人々賞を授けては  
て歌をももむとをうむよ手は  
るいもてかすはこつてこい  
公詞をいひあし侍りあし  
の生も童児をみるやうよなり也  
をとくも仙学者の道德なり  
醫學者農療治りうと  
ことし又りこつと申入る  
舞の卒をみてもや趣由乃  
てうとつと申す也海して儒仙神  
書の類をふむことと皆和歌  
の情よつとすといふは  
補名院殿曰歌をうむむまの  
少し書をみてはかちぬといふ  
はあ寸心このりを志うとい  
はんとしよ取し心を付へ

和歌無師近唯以舊歌為師

和歌和ハ世間の名也哥ハ世  
間の風也和歌ハ則世間乃本  
理也和の字を以てりよ時不  
剛不矛盾是を和と云是中和の  
和也中庸あり申天下の大平也  
和天下此達道也致伸和天地  
位一カ物育也知和和以礼不



位一カ物育也。知和和以礼不  
節亦不可行。是和乃曰。禮  
節有之。をいふ。彼時節景氣  
時宜よあつるとみるへし  
綿よ鈕を述べるといふを  
をの義也。神道乃土金乃傳よ  
心と一かうへし。かやうの和は  
神慮よをかき人の心をや  
る。徳を具し侍るへし。今世よ  
このたぐる。哥意味し。さうす  
たへん。さうする。風情又一向ある。然  
し。さうする。歌よ。いふ。鬼  
神を感得し。しる。徳あり。や  
又此國よ内曲外曲わつる。け  
以前よ。以和歌。得果せ。甲。西。一  
切よ。わつる。眼前の境界。和光  
隨縁乃。み也。内證。何字。在  
不生の道理を具せり

又天皇乃。施由維尼。漢字乃。詩文  
を。も。四十七字。乃。和字。を。以。其。心  
を。述。し。ら。ま。和歌の徳也。亦  
詮二神陰陽乃。和歌。今よ。を  
けりて。乾坤一切。万物を。や。り。の  
道也。仍曰。和歌。無師。近。といふ  
是。大。也。也。悪し。く。心。を。大。皆  
あや。ゆ。り。と。ある。所。也。先。和。可。よ  
師。近。といふ。謠。舞。の。や。う。も。あ



師近なりといい謠うたのやうようある  
ことをくらくらむねするするままあるある  
新あらたしくくみ出いす道みちたたるるはは  
かかいいるとと也や又また上古こゝろの歌うた仙せんといい  
ぬぬるるはは師し近なりといいるるははよりより  
と云いふふ也や但ただ新あらたままををままととはは  
有あるる人ひと丸まるすすくくはは乙おと河がののちち小こかかりり  
ははくく多た甲か能のう固こハハ長なが能のうああららいい  
後のち成なりハハ基もと後のちをを師しととすす也や車くるま子こ乃の  
道みち子こ歳としをを経へてて程ほど子こ乃の津つままりり  
かかこことと小こ町まちハハ老お道みち指さのの流ながれれ  
師し曰い今いまもも人ひと丸まるのの津つ才さい子こ有あるる  
和わ哥か無む師し近なりといいハハ和わ歌か之の本もと  
定さだ家かハハ古ふる人ひと集あつ集あつ一いつ部ぶをを眼まなこととて  
歌うた道みちををししてて多たくく入いるる定さだ家かハハもも  
貫ぬ之のをを師しととすす貫ぬ之のハハ人ひと丸まるをを  
師しととす

人ひと丸まる貫ぬ之の定さだ家かをを和わ歌かのの為ため  
三さん尊みことをを當あた流なが秘ひ傳でん也や又また天あま子こをを  
父ちち母ははといいふふにに同おなじじききのの人ひと間ま  
ああららぬぬ道みち理り也や又また曰い根ね本もと二に神かみ  
のの津ついいををししてて下した照て姫ひめハハ雲くも  
神かみ詠よみいいふふををししててししるるはは里さと多たくく  
とといいふふここととををししてて和わ歌かハハ自みづか力ちから  
發は洩はのの道みちををれれ師し近なりといいふふとと  
いいふふををのの義ぎたたららへへししはは事こととと  
七なな里さとををああららははるる自みづか見みのの人ひと師し



いづるをの義たりへしは事と  
此理をあらはる自見の人師  
近ハくぬ物りとあり。讀方此  
相傳をえう多し。哥書一冊の  
清濁をさうかき。我乞り  
ゆる海うをさし。そ邪え  
放送乃支也

又無師道といふ大傳あり。  
此書のそしめに情以新為先  
とある。そ覺悟す人あり。あは  
き支をわ心と思案志いお  
事あられて師道ハ有へし

宋家つゝ古今集を以歌道の  
正義を覺知し。二條家乃平流  
をえし。海をさし。古今序は  
やほといふ人の心をいねとそ  
らうけのこころ。禁とさうわら

もる。せあまをわう心の外は別  
師ハさうといふ。真實の作  
えん。あし。わ。ゆり。ま。た。た。た  
ゆ。い。う。詞。を。あ。は。て。心。よ。お。よ  
こととをみる。そのま。そのりは  
多てい。い。出。れ。時。い。よ。の。つ。孫

乃俗言。ま。し。歌。よ。あ。は。し。ま  
あ。う。う。歌。乃。詞。風。律。を。見。お。り  
て。い。こ。し。い。よ。ま。の。は。り。也。又。詞  
を。先。達。よ。あ。く。と。い。わ。歌。の。詞。を



を先達よあくとわ歌の詞  
いさかねも志進はる事多し  
かくいふことも何といふ也  
此てにををりて、此公かくい  
こえ寸わくをとめり寸又此詞  
の優也をいふやけしをとい事  
よ先達よあくとわい約い  
これもある中志進はわ歌無師  
近とりみ切て可む也とい人  
母の子小乳ををい小入る事  
新の子に乳をの乳とをい  
志進いあれとをのこ入る所ハ  
子の自業自得をい無師也  
あるへし一首作りたる事  
其作詞りはもて先達の旧歌  
のちい有又よりわこの上の古實  
當世は中あへきこととい此  
病等よりくる事二條家乃こ  
流を受はるる師ありあは  
きかねる事ぬをい也自本實  
この心ハ作者乃公をい  
をしものもやし。 禪家此教  
外別傳ハ公傳公といは同。  
佛界は至事といて。 諸經  
諸論の教有仏果を得る所ハ  
をいへき詞をい。 言語道断の  
さかい也。 此は大事也。 古今序を  
川支は傳しと不可説乃  
也



唯以舊歌為師

也

旧歌といふ葉より三代集よりて  
の内乃らうし歌心公公ともしよる  
かく實のかくうら所をくれし師  
と務うの教也

深古風

古歌の心を観念し公深古風よ  
といふまは此一再此眼目也是相傳  
也安公也不也明之

誰人不詠之哉

發端情ををく詞を訓へ風  
律を訓へして古歌の取やうを  
訓へ風律乃あしき法をくへ  
常に観念すく古歌并よ  
見ちる相神い歌書等をあ  
け其い古人の上手をけし又  
堪能先達をあり其外  
時節乃景氣世間乃感感裏也  
観念後といひ白出文集で  
るくしよのをく誠有か  
和歌乃師也定家つ比忌由り  
公をくし此一首をよみて手  
白へき古風

又和歌無師近舊歌を師と  
辨心深古風詞を先達  
ありくしれををくし



あつていふれつをよるはむ  
とらまきく前はやすくと教へら  
進をよりして座乃公の情を古  
風のいまやうに新しく求む  
旧歌の凡作を師として詞の先  
達を聞て真実たる拙古歌を  
今も人書書集之有へしと也  
又曰わうに微細なるをうむ  
甲し傳を受て三條家よりかか  
大御自らもしりしよかか  
〜むはまことやすきは似てか  
かゝるは似てやま〜早竟  
らむ事れかゝる也其くハ人  
の度量とまゝ實とふらるる  
自身發得として可入歌境  
を不可説乃儀也

上巻終奥書在次巻

可貴可仰



詠歌大抵安心秘訣

心を古風一深詞を習先達と  
事才一乃まよをを和歌乃安  
心也先古風とゆきするハ上古  
乃歌也万葉集其外上古乃  
歌ともハ大畧文義をかう寸志  
のゆく起り但て身に面白相  
悦ふ様ハあつ是ハ真實乃



懐ふ様よあはれ是は眞實なる  
心をありのまゝに云出て教誡す  
是歌道の實意也古今眞名  
序は但古實の語をなして  
未耳目の貌と執す徒教誡に  
くしとすと有を也杯歌混沌  
未分り時より五音五好ともに  
食て有也二儀相別てより花  
中寫樹上蟬風吟峯上浪  
叩海岸之皆以和歌の音群  
うあはれといふまゝなりはれハ  
歌ををのましく思ふ心のうち  
を言語よあはれ道ありを  
徒は節物よえまじ文美をか  
妖艶をいふとして実をとり  
まじし事正道よあはれ昔  
乃こし此眞實よこわれ風群  
る心をうたふとをこし一性  
聞えしうたふことなまはれ有  
先上古の實を捨るよあはれ古  
今の序は神世七代時實人淳  
情欲無分志れしことといふ  
りてして詞を粹を定むる事  
あり假名序よえそ乃やう也  
あはれまゝとせといふ又同古  
今眞名序あり其實皆落  
其花亂業といふ未代よ上古  
の實たる風群を時代不相應  
るれを人乞を感する心なり至



なれを人乞を感ずる心なり。至  
愛和歌すするべきを真花孤  
さうある花中より実を求て  
人丸赤人等の名師世よ出て上  
古末代断絶なり。様は歌道  
をろ免するに也。其は六義  
十律を定免。濱成孫非喜撰  
なと和歌乃式を伴甲。室病公病  
をいそ。よき中よりきと一取。  
悪しき中よ悪きを捨。加之  
時代のぬ士家の髓。心こ  
乃故実を教へ。詞を切。差し心  
を孫。庶して末代。下て。時代  
相應。人の心をや。け鬼神を  
感ずるやうに。此道を教へ。り。  
乞誠は大道す。うれて仁義  
か。ころと。よ。同。志。か。を。わ  
か。えて。上古の淳朴。乃。詩。を。真  
實。乃。古。凡。妙。也。と。い。は。る。り。  
思。索。沉。思。乃。心。を。ち。り。月。の。ち  
よ。花。ハ。艶。ち。り。と。い。あ。り。す。く  
と。讀。を。歌。道。の。真。実。至。極。と  
よ。人。あ。り。又。古。凡。の。心。を。い。む。と  
よ。て。言。ふ。お。の。の。中。の。俗。言。俗  
態。乃。う。く。又。お。う。う。き。言。葉  
ち。と。代。用。い。て。よ。し。人。を。う。り。  
を。百。家。お。れ。古。凡。を。捨。る。り。ハ  
あ。ぬ。と。い。む。り。乃。淳。朴。此。詩



あゝねとまむしうしう淳朴此神  
よかうてよむむとすうまは還  
て今の世乃愛見也和歌  
ハカ葉ころ撰集乃くし先  
歌乃根をく哥道ハ是也  
とすくしとて顯明也別て  
百葉乃神を心よ保て自乃歌  
をそそ三叶且い神よふむしと務  
ゆつしとて時代不相應可れ  
人乞を感得さる也感する心  
くれる和人倫道なり鬼神  
を感するく歌前詮感乃一字  
とさうへく又つて古今序記  
よかきうくい出氷りすし  
乃声ハつてまうや又序よみ  
のきくものよはとていい出勢  
といへん沉思り及へくすゆて  
木義をかさるへくすと情を  
よ人そあ甲はもあるへくれと  
うまハ上代古風乃実乃ま  
て今の世りまよるむしと事  
ナカ荒玉よかうてと云や也  
和公之大輅推輪不有竹具  
とあり是上古の淳朴の神  
かうてよむむしと良基公の  
被原し返巻也此ハ昔推乃  
柄のたうをみて車の輪を  
ゆつ軸を廻し轆を打沖を



車を廻し轆を打漣を  
けりてころり千里れ道をとり侍  
と今の車をいきて誰の推の  
かろと思日侍らむや志くせと  
古風の淳朴れ心討よゆり揚前  
後時代をたかかろり侍らむ  
といふいふ已前乃推柄のこと  
是より糸て千里れ道遊りす  
くすと被りしもの古風よ心を  
清らといふことありいゆといぬ  
きく又や後よいふ古風の古又  
定家ついに東り集を以て此道  
の至極とて二條家れ正流は  
古今より建立の歌道也別  
真名序より近代に古風者  
終二三人といふ此古風也  
貫之のさす一和定家心深く  
信作也世下より奇仙をわけ  
て別古風を存しける歌と  
をあそびしころり

僧止

浅みとうる  
蓮葉の濁  
名もたて

業平

月やあめぬ  
大かこい月をえ  
ねぬる夜

康秀

吹くくま  
草あろり

喜撰

わら庵は

小町

思つて  
色みえて  
俺めまて



小町 思つて 色みえて 佗めまて

累生 思つて 色みえて

此六人よかきうねとを殊り上  
手たる故如北極人丸赤人好  
の實法たる中らむ詞より  
をばし務義は実をむすし  
て楽詞樂言よりみ出せよ  
ま又上古末代の手書也如此乃  
古風乃神をなする歌也  
たれと今乃世は此人この歌  
を聞て是を感銘すといふ  
人なりは道と百業又上古乃  
淳朴俗言俗態よて公當時  
感する人あるへい 實を以て  
貴之の訓へい 實年也喜  
の比より 歌乃風もいかに

優りて志が実をばさる  
り是貴之の手柄也はまを  
其實皆と洛具は孤榮分  
時代なれと古今假名之序も今  
乃世中色は法身人の心記  
小きるなりあると歌をうけ  
きことよのこ出られと世ころこ  
の家は埋木乃人しきぬと  
たりぬたなる取なりは花薄は  
出す人きこと少毛あると  
にふるまといふは世このと家



にいろせといふ。色このこと。家  
也。色小はま花をのこ好む  
家よ。実たること。埋木のや  
に人志も寸たりてあつちる。  
をうたひきこと。のこ出斗あせ。花  
此艶小花たるを好て実を忘  
らう。又ゆ光なる一和よ。上古乃  
淳朴の實たるを又を好て花  
よ艶たること。薄乃のほよ。寸  
穂よ。こと。小をあ。寸あり。うせ。也  
乞又実乃。こと。い。あ。る。き。と。い。ふ  
也。也。古風の秀歌。花実兼備  
貯品々。か。つ。出。去。也。実を取  
花を。し。捨。寸。花。を取。て。実。を。を  
寸。て。寸。花。実。相。對。を。和。歌。の  
中。道。也。此。抄。よ。人。凡。實。之。忠。本  
伴。舞。小。町。等。ま。ま。い。ふ。所。の。古。風  
あり。則。古。今。集。花。実。相。對。の  
集。也。以。是。定。家。々。此。真。実。乃  
古。風。を。覚。知。し。て。此。抄。よ。觀  
念。古。歌。景。氣。深。心。古。風。を。訓  
行。へ。う。い。ふ。こと。よ。有。り。き。事。也。  
相。又。古。今。集。と。を。その。う。う。寸  
幽。去。乃。古。風。の。神。よ。い。何。く。寸。俗  
言。俗。能。一。を。あ。り。或。は。と。何。う。の。か。  
よ。鼻。毛。を。ぬ。裁。と。い。い。わ。ま。思。ひ  
人。と。お。え。く。ぬ。む。ら。い。や。は。い。う。ら  
ん。く。先。ち。る。幾。き。風。神。を。侍。道  
詞。の。善。悪。ハ。習。先。達。と。此。抄。よ  
書。行。へ。殊。務。の。事。也。い。ふ。万







末学未練のともかゝるの及一節は  
あつたはしとて其心波の詞の細詩  
はく不及よはく初学の時作  
其道を捨つかるへく人の耳に  
ちかく誹諧等乃やうとみけるを  
へく先初学のそ乃うて品  
作きて其道よととはる也極  
極古するよとみかむて古風の  
秀逸を毛同ちう見ちうあ  
後う心此道乃正流をちう  
也はしとて古今う色この歌の  
様色こ風作誹諧又いよく  
とちうはしとてちうやう  
をを撰し入う。是は此道をちう  
をそつうを何もるま道小入を  
え道理有入ての後ハ修り  
カハ中や識り大切なる撰集の  
あつてあつ。於又代しの撰集よ  
はるは地うを入く道こ  
是又因しす也。初学は軍集  
撰集よある地うかとのやすき  
こゆるをみてやもくをとつて也。  
易の道の難り道なれとて先  
かき道はうとて其の也志を  
古今とて軍集のこつあふ自  
實十歳辨するよ依て其後新  
撰三百六十首を撰。古今集乃  
中より二百八十首を二取外て去  
乃去也といふ。此うことこらるは  
こは古風の正流なりかやうに  
古今の撰しうこらると思へる。  
撰集ハ天下公界此集ハ私











の歌人の秀歌としての変也し  
俊成々の詞よりして眞実乃  
古風の辞よりして純粋也  
ちよと又新古今として彼手  
のうらひは有る事にして偏よハ  
不可作集は中よと乃秀歌を  
心より多くて可学なる万葉の  
遠く和歌才の古今集を  
りよし心えぬ人乃新古今を  
りし心せぬへし此新古今を  
ちよくの辞あり仲古乃すも  
有幽玄乃ちよと有又は  
ことうのちよと有是又古今  
集より出づれも各別よも  
こと語甲よりへし是を了洞  
するは中古の風と好し又今乃  
時代和歌乃衰へるもの差  
利也かやれ心とちよと出  
世乃好まぬ心を入る歌  
むいし新古今風なりを  
又古風よちよと染るの付  
をよきてよみたるを還て時代の  
風よ北すやいはいおとすあ  
ゆもよちよとせきわんよえぬ  
眞実乃古風と志くはる故也  
ちやうよ心えてやうし中古乃  
風よ近代乃よかき歌  
かとりよきこえよとて眞風



かとうききこえいとして真風  
をらしし一筋に学いやすくて志を  
秀歌とよむ事ハかゝり  
真実の古風は心を深し前は  
よく心えぬ事を還てよくやさしく  
秀歌をそのはよく出ずる也  
~~兼~~連うと手かく者えわさう  
をとるゝ人の手跡はまをい  
やすし。我らも自ら手かく  
いさゝし。李絶邪眼をわい  
案すると先こゝろよりやれ  
わさし彼人のよくしやうは業  
はしぬゝしといふ書てむ  
やといふ。又中比の人  
はしえおけりて會せし  
人このういこと聞はわ  
いぬ風情はいとわ  
はけりてとるまをいさ  
をとりておほゆか  
ころ有しかと聊も公の  
風情はかりき。清  
をわらひのいさ  
よりぬ事乃人毎より  
はして、此道はよくこ  
きはもちあふこと  
かろはく。覺えん。是皆  
上古乃上手也古風は  
の事やを可深んや也か



の事やを可深心也也か  
いへともいふ乃古風一大事也真  
實乃修好の上ありて也未練  
りて此古風をいふしといふも  
事又其失有へし上手なり  
うりともよりみ換へし心  
おまへらき古文を覺本なる  
わきこころ心えぬ事になりて  
無心不着よなるへき也一也  
かろ乃歌の何の節にたり  
えせしよはおとるたるへし  
学者思慮して悦ばすへ  
處也相心々新く詞の三代集  
をいふも其心小古風となり  
先達へあふ外別乃教へは  
實をよるも学あふ事、和歌を  
詠すといふ事有へしと也  
和詮歌道ハ有本實と不実  
とより邪正有と知へし是  
此書の案心極秘也  
左可秘



右之二卷者歌歌大概

安心秘訣也

法印宗智明心居士撰野

屋翁的々相承く趣而深



不詮歌道ハ有其實と不実  
と云ふ邪正ハ有と知へし是  
此書の案心極秘也

左可秘



右之二卷者蘇歌大概

安心秘訣也

法印言昔明心居士披野

履翁的々相承之趣而深

雖令密強依爲懇志王于

今附于訖如誓盟入王不可

有他見漏脱者也

風觀憲

元禄五<sup>十</sup>申<sup>十</sup>歳



仲繩吉辰

侍後反